“パワフルな女医”が目標、求められて乳腺外科

研鑽積む日々、留学の野望も -テーマ3「女性医師」 Vol.1-

オピニオン 2018年8月3日 (金)配信 JCHO久留米総合病院 乳腺外科医長 大塚 弘子

JCHO尾身理事長が語る「テーマ3『女性医師』」はコチラ

大塚 弘子 Hiroko Otsuka
JCHO久留米総合病院 乳腺外科医長

【略歴】福岡県出身。2002年徳島大学医学部卒業し、社会医療法人財団池友会小文字病院・新水巻病院にて臨床研修後、久留米大学医学部外科学講座入局。社会保険久留米第一病院、地方独立行政法人筑後市立病院と関連病院を勤務し、その後帰学。久留米大学医学研究科博士課程修了、九州がんプロフェッショナル養成プラン先端癌治療学悪性腫瘍専門医養成ユニット「化学・薬物療法専門医養成」コース修了。2013年10月よりJCHO久留米総合病院乳腺外科所属、2014年4月より同乳腺外科医長。

【所属学会・取得資格等】日本外科学会専門医、日本乳癌学会乳腺専門医、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医など

祖母が亡くなるに際して感じた無力感と、小学5年生ながらに芽生えた、「自分が何かしたい」「何かできるようになりたい」という強い気持ちから、私は医師を志しました。そのまま高校卒業まで気持ちが変わることなく時が過ぎました。しかし最初の受験では医学部に不合格。いったん薬学部に進学しましたが、やはり医師になりたい気持ちが変わらず、親に「医学部受験させてほしい」と懇願し（今時古いですが、お座敷で正座して父にお願いしました）、受験を許してもらい、徳島大学医学部へ入学することができました。

外科への道は、臨床実習の中で見た外科的治療がきっかけです。腫瘍が摘出されるのを見て、「私もしたい」というふつふつとした気持ちが沸いてきました。当時、外科の女医は少ないながらも、どの先生もいきいきと仕事をされており、「自分がやりたいことをした方がいいよ」との言葉もいただき、励まされて外科を専攻しました。

私が今、勤務する福岡県南部・久留米市のJCHO久留米総合病院は、病床数175床の地域中核病院で救急告示病院になります。前身は社会保険久留米第一病院であり、その当時と現在のJCHO久留米総合病院になってから、合計で2回目の赴任となりました。社会保険病院当時から乳がんや婦人科良性疾患など婦人科疾患の症例が多い病院でありましたが、JCHO久留米総合病院になってからは年間の全麻手術症例約1900例のうち、乳がんの手術症例数は約400例（乳腺良性疾患も合わせると約700例）と乳がんに関しては全国でも有数の手術症例数を誇る病院です。

手術室での様子

徳島大医学部を卒業後、故郷・福岡に近い久留米大医学部の外科学講座に入局し、初めての出向先が社会保険久留米第一病院で、当時の外科部長が現院長の田中眞紀先生です。「パワフルな女性」とはこの人、というような先生で、強烈な医師像を目の当たりにしたという記憶が鮮烈に残っています。

消化器外科から「求められている」実感で乳腺外科へ

外科を専攻した当初は手術手技としても消化器疾患が楽しく、やりがいを感じ始めていたところでしたが、当時はまだ外科の女医は珍しく、高齢の患者さんからは医師よりも看護師に間違われることもしばしば。しかし乳がんの患者さんたちからは同性だから話しやすいなど、女性外科医であることを求められている実感を覚えました。乳がんについて知れば知るほど、その診断から治療、その後の長い経過観察など、その患者さんと長い時間を共有しながら治療していくことに充実感も得ていきました。その後、消化器疾患の多い関連病院へ出向後もその思いは消えず、帰学する際に専門分野を乳腺に決めました。

乳がんという疾患について勉強していくうちに、治療に関して消化器がんとの違いなどを知り、臓器を越えて何か応用できることはないだろうかと考えるようになり、乳腺専門医だけでなく、がん薬物療法専門医も目指すことにしました。

2013年秋、学位審査と乳腺専門医、がん薬物療法専門医の試験を受験したのですが、JCHO久留米総合病院に10月付で赴任し、その月から毎月試験受験でしたが、手術の割り当てや病棟担当医の調整など、外科チームの中で調整してもらい、無事試験合格を果たすことができました。縦横の関係において風通しが良く、いざとなれば皆で一つの課

題に取り組むし、誰かが問題を抱えていればサポートもしくは一緒に解決に当たれる関係というのが、現職場の働きやすさにつながっているものと思います。

女性医師という立場として考えても、同じ病院内に託児所が併設されており、子供の学校行事なども年休を申請することを遠慮なくできる職場というのは、医師の世界では珍しい気がします。キャリアアップのために仕事中心の生活を選択するのも良し、今しかない子育てを可能な限り優先しながら仕事をするのも良し、という雰囲気なので、女性医師としては常勤医だけでなく非常勤医師も多く在籍しております。前者の最たるroll modelが現院長だと思うので、久留米大の外科女医は子育てしながら常勤医で手術をこなしていくのが普通になっています。

国際的な活躍も！

私自身は毎日、目の前の診療に追われつつ、年間平均4～5演題を学会発表している状況ですが、個人的には英語の語学力上昇、もっと言えば留学でもして国際的に活躍したいという密かな目標を掲げています。社会保険グループからさらに大きなJCHOグループとなった今ならば、海外留学プランなども研修コースとしてできれば、大学病院の医局に所属してからの留学という方法以外の選択肢となり、大変魅力的に感じます。

最後に、10年後、20年後も臨床医として第一線で仕事をしていき、かつての私が現院長に対して抱いたように、後輩から見て目標とされ、周囲からの信頼に足る存在になっていたいと思います。それには自分自身の研鑽ももちろんですが、仕事をしていく上で何事も自分一人でしているわけでなく、医師だけでなく全ての医療従事者や、家族など周囲のサポートあってのことということを忘れずに、感謝の気持ちを持って仕事に当たっていきたいと思います。

JCHO尾身理事長が語る「テーマ3『女性医師』」はコチラ

シリーズ **「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～ »**